慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	勤王志士野史編者贈從四位飯田忠彦小傳(武田勝藏著)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.3 (1935. 12) ,p.169(535)- 170(536)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19351200-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

つたとしても（ある思想が精確にある時代に至つて初めて現れたか、それ以前から存在したかは非常に證明に困難な問題ではあるが）それは史記以後の潤色によるものであるかも知れず、少くとも左傳の稿本とも云ふべきものは、史記以前に存在して、却て史記に材料を與へたものではあるまいか。かく解すれば、著者が後世の補入とされた史記十二諸侯年表の序中の語なども、抹殺する必要はないのであり、著者は自說を證する爲、尙多くの竄入を多くのテキストの中に指摘されてゐるのであるが、かくの如きは著者の論ぜられる漢儒の恣意な態度が、著者にまで依憑したのではないかと、やゝもすれば讀者をして不安を感ぜしめる憾もある。春秋に對する見解も、あれだけの論述では、前述の結論に導く必然性もないやうである。

以上かくの如き勞作に對して、あまりに禮を失した形であるが、多くの示唆と啓發とに富むこの大著が、爾後の左傳研究者に對し、如何に與ふるもの多く、且つ大なるかは、今更喋々するまでもないことである。（索引及び英文梗概付、定價七圓）（杉本忠）

元寇史料集（國民精神文化研究所印行）

元寇史料は國民精神文化文獻（二）として印行されたもので、貴重な元寇史料を複製して二卷の卷物に收め、讀者をして直接原形に就いて研究し得るの便を與へたものである。別に附せられた元寇史料集解說は、本史料集閱讀上の指針である。

內容の第一は宏覺禪師祈願開白文（京都正傳寺所藏）であつて、これに於ては宏覺禪師その人の敵國降服を祈願する切々たる愛國心が窺はれ得る。第二の北山室地頭尼眞阿請文（石清水八幡宮司田中俊清氏所藏）に於ては、北山室の地頭職たる眞阿がその子や聟を激勵して外寇防禦に馳せ參ぜしめた悲壯な意氣や、井芹秀重が自ら步行し得ざる八十五歲の老齡でありながら、六十五歲の嫡子以下を馳せ向はしめんとした決心など、當時の國民が男女老幼の別なく國難に當るの頼もしい精神を知ることが出來る。終の壬生官務家日記抄（京都帝國大學所藏）は弘安四年當時の日記であつて、その筆者は明らかでないが、これによつて當時異國降服御祈願のための二十二社奉幣、龜山上皇の石清水御幸、御參籠、公卿勅使の伊勢神宮御差遣、八陵に異國降伏御祈願の宸筆を籠め奉られし畏き御事蹟、軍勢召集兵粮米徵收のための幕府の奮勵などが窺はれ、舉國一致を以て國難に處した尊い精神を傳へるものである。

かゝる古文書の普及によつて、日本固有の麗はしい精神を現代の國民に傳へんとするは、眞に時宜を得た企圖といふべきである。（有賀春雄）

勤王志士野史編者贈從四位飯田忠彥小傳（武田勝藏著）

有栖川宮家に勤仕し、勤王の志士として知られ、特に野史二百九十一卷の編纂を以て讃へられてゐる幕末の史家飯田忠彥の生涯と、その野史編纂の苦心とを敍したものであつて、著者は廣く忠彥關係の史料を調査せられ、多くの興味ある史料をそのまゝ揭げて平易なる說明を施し、容易に忠彥の偉大な業蹟を知らしめんと

企畫されてゐる。殊に、今日傳はる野史の目次に見えながら、その本文を缺いてゐる卷二十一本紀第二十一の仁孝天皇紀と、卷六十四列傳第四十三武將三十の文恭公傳（十一代家齊）のうちの、仁孝天皇紀の未定稿の一部が、忠彥最後の隱棲地たる京都の淨蓮華院に於て、著者自からの手によつて發見されたことは、最も注目に値するものであり、その發見は學界にとつても慶事と言はねばならない。外に忠彥の遺著編について其の代表的なものを擧げて說明を附し、遺詠・書狀などをも收錄せられ、百二十頁の小册ではあるが、よく完璧なる偉人の傳記となつてゐる。御三家の威勢と天下儒員の協力に成る大日本史と、一介の貧書生たる忠彥の獨力によつて成された野史とを比較し、忠彥の苦心を追想してその英靈に敬意を表すると共に、かゝる書の自力印行を企てられたる著者の精神にも誠に尊しとせざるを得ない。（有賀春雄）

大日本讀史地圖（吉田東伍著　芦田伊人修補）

富山房發行

歷史家は登山家の如く精密・正確な地圖を必要とする。登山家は幸に參謀本部陸地測量部から發行される廉價にして優秀な地圖を直ちに求め得られるが、歷史家はそれをどこに求めたら良いのであらう。

私は十年來吉田東伍博士著「新編日本讀史地圖」を座右に置いて少からざる益を得て來た者であるが、餘り頻繁に使用して感謝の念など寧ろ忘れた形であつた。たゞ恨みとするのは特に私の好む方面が幾分缺けてをりこの點申し分があつたのである。

所が今年夏その新版があらはれた。名も「大日本讀史地圖」と「大」の字が加はり、內容も之に應じて膨脹し堂々たる大册である。相變らず故吉田東伍博士の著とあり、蘆田伊人氏の修補となつてゐる。之は蘆田氏の今の世には珍らしい恩師に對するゆかしい心情の表はれ、謙遜の態度である。實は吉田博士が他の二氏と共に高橋健自博士の發案に基いて作製せられたるものは遠く明治三十年の發刊にかゝり、その後、大正六年、十二年の修正版は總て嘗て吉田博士に師事したりといふ蘆田氏の手になり、而も此度の新版は前版の六十七圖に比して八十二圖になり、その八十二圖中舊圖の存するもの僅か十八面、他は悉く新作、若しくは大に訂正を加へたるものにかゝる。之を以て蘆田氏は修補と稱してゐられるのである。

內容を見るに前版に比して製版更に鮮明、種々工夫が加へられ、從つて最後の圖版說明も書改められ、又圖版の增加せる中には、先に私が申し分ありといつた圖版も幾つか增補せられ滿足した。

然し考へて見ると蘆田氏は幸福な人である。この新版を完成される迄の氏の苦心は恐らく想像以上と思はれる。私のいふのはつまりその苦心の幸福である。誰人も學問の分野に住む人は嘗て發表した自己の仕事に滿足してゐる人はないであらう。貧しい自分の經驗でも校正の進行中既に誤謬を發見し訂正したき衝動にかられる。況んや二年、三年、五年と經てば愈々缺點は擴大增大して來る。訂正したくとも中に事情はそれを許さないのである。この意味に於て蘆田氏の如きは己が功を誇らず、而も默々として理想若しくはそれに近いものを遂げられる私のいふ「幸福の人」である。